

女子学生の喫煙に対する態度とその保健意識

渡 辺 紀 子*

(1992年10月15日 受理)

Smoking Attitude and Health Consciousness of Female Students.

Noriko WATANABE

I. は じ め に

喫煙の健康に及ぼす悪影響は1950年代より指摘されるようになり、WHO やアメリカ、イギリス等で喫煙問題に関する多くの報告書が出され、種々の調査研究で喫煙は広範囲な健康障害をひきおこすだけでなく、受動喫煙により周囲の非喫煙者の健康にも悪影響を与えることが明らかにされた¹⁻³⁾。

さらに女性の喫煙は妊娠、出産、育児などにも大きな害を及ぼす^{4) 5)}。

我が国の女性の喫煙者率は1989年に14.3%であり、男性の喫煙者率(60.5%)や欧米諸国の女性の喫煙者率に比べると低い(表1)、男性の喫煙者率は徐々に減少の傾向を示しているのに対し、女性の喫煙者率は1970年代より横ばい状態であり¹⁾、また20才代の喫煙者率は特に高い⁶⁾。

女性の喫煙防止の手がりとして、女子学生の喫煙に関する調査研究がいくつか行なわれているが^{11)~15)}、今回、鹿児島市の女子学生について、喫煙の状況、喫煙に対する態度や知識等に関する調査を行なった。

表1. 諸外国の成人喫煙者率

(単位: %)

	男	女
ア メ リ カ (1987年)	30	24
イ ギ リ ス (1984)	36	32
オーストラリア (1983)	37	30
スウェーデン (1986)	26	30
オランダ (1982)	41	33
フランス (1982)	49	26

資料: World Health Statistics Quarterly

*鹿児島大学教育学部保健体育科

Department of Health and Physical Education, School of Education, Kagoshima University

Ⅱ. 調査の方法

鹿児島市内の医療短期大学、女子短期大学、共学4年制大学の1・2年生の女子学生を対象に、1988年10月～11月に、無記名、質問紙法により調査を行なった。調査の内容は、喫煙の状況、喫煙環境、喫煙についての意識・態度等に関する29項目よりなり、有効回答数は医療短大生150名（1年生73名、2年生77名）、女子短大生199名（1年生83名、2年生116名）、4年制大学生200名（1年生103名、2年生97名）で、有効回答率約94～98%であった。

なお、対象者の年齢はいずれの大学も1年生18～20才（平均18.7才）、2年生19～21才（平均19.7才）である。

Ⅲ. 調査の結果

1. 喫煙の状況

女子学生1・2年生の喫煙の状況を表2に示した。今までに喫煙を経験した者（喫煙経験者）は全対象者中79名（14.4%）で、このうち喫煙習慣のある者は女子短大1年生2名、同2年生5名計7名（全対象者の1.3%）のみで、さらに毎日喫煙している者は4名であった。

喫煙習慣も含めた喫煙経験率は大学による違いはみられなかった。1年生と2年生では、各大学内では有意差はみられなかったが、全体で1年生より2年生の喫煙経験率が有意に高かった。

表2. 喫煙の状況

(対 象 者)	喫煙経験あり*	喫煙経験なし
医療短大生 (150人)	21人 (14.0%)	129人 (86.0%)
女子短大生 (199)	34 (17.1)	165 (82.9)
4年制大生 (200)	24 (12.0)	176 (88.0)
1 年 生 (259人)	27人 (10.4%)	232人 (89.6%)*
2 年 生 (290)	52 (17.9)	238 (82.1)
合 計 (549人)	79人 (14.4%)	470人 (85.6%)

※喫煙習慣者（女子短大1年生2名、同2年生5名）を含む

* $P < 0.05$

喫煙習慣者の喫煙量は1日10本以内3人、11～20本3人、21本以上1人で、短大入学後吸いはじめた者4人、入学以前からの者3人であった。

喫煙の動機は主に好奇心からであり、食事の後やお酒を飲む時によく喫煙している。

女子学生の喫煙と家族の喫煙の状況を表3に示したが、父親の約40%は喫煙習慣者であり、母親

渡辺：女子学生の喫煙に対する態度とその保健意識

が喫煙習慣を持つ者も14名（2.6％）いた。しかし両親や家族の喫煙と女子学生の喫煙経験とに関連は認められなかった。ここで喫煙経験者は祖父が喫煙している者が多かったが、家族に祖父のいない者もあり、祖父が喫煙経験に影響を与えているとはいえない。

表3. 家族の喫煙状況

女子学生の喫煙状況 家族の喫煙状況		喫煙経験あり (79人)	喫煙経験なし (470人)	合 計 (549人)
家族 の 喫 煙 者	父 親	28人 (35.4%)	190人 (40.4%)	218人 (39.7%)
	母 親	4 (5.1)	10 (2.1)	14 (2.6)
	兄 弟	15 (19.0)	82 (17.4)	97 (17.7)
	祖 父	8 (10.1)	12 (2.6) **	20 (3.6)
	祖 母	4 (5.1)	10 (2.1)	14 (2.6)
家族に喫煙者なし		35人 (44.3%)	215人 (45.7%)	250人 (45.5%)

** P<0.01

2. 喫煙に対する意識・態度

喫煙の有害性については、全体の49.7％の者が喫煙は健康に非常に悪い、また42.5％が悪いと答え、90％以上の者が喫煙の健康への有害性を知っていた。しかし受動喫煙の健康への有害性については一応90％以上が悪いとしながらも、非常に悪いと答えた者が少なく、喫煙経験のある者はさらに非常に悪いと答えた者の割合が少なくなっている（表4）。また受動喫煙による迷惑度も喫煙経験のある者は経験のない者に比べ、あまり迷惑に思っていない。

表4. 喫煙の健康への影響等について

喫煙の経験		経験あり (79人)	経験なし (470人)	合計 (549人)
項 目				
喫煙の健康 への影響	非常に悪い	32人 (40.5%)	241人 (51.3%)	273人 (49.7%)
	悪 い	38 (48.1)	195 (41.5)	233 (42.5)
	悪いとは言えない・ 適量ならよい	9 (11.4)	34 (7.2)	43 (7.8)
受動喫煙の 健康への 影響	非常に悪い	20人 (25.3%)	193人 (41.1%) *	213人 (38.8%)
	悪 い	53 (67.1)	243 (51.7)	296 (53.9)
	悪いとは言えない・ 適量ならよい	6 (7.6)	34 (7.2)	40 (7.3)
受動喫煙の 迷惑度	しばしばある	32人 (40.5%)	290人 (61.7%) ***	322人 (58.7%)
	たまにある	40 (50.6)	165 (35.1)	205 (37.3)
	めったにない	7 (8.9)	15 (3.2)	22 (4.0)

* P<0.05 *** P<0.005

次に喫煙との関連が明らかにされている疾病を中心に、喫煙と健康障害についてたずねると表5に示すように、肺癌、こう頭癌、ぜん息、気管支炎等呼吸器系疾患と喫煙との関連は大多数の者があげている。また胎児への悪影響についてもよく知られていた。しかし胃癌、胃かいよう、心臓疾患との関連はあまり知られていない。喫煙との関連疾患等については、医療短大女子学生が他の2つの大学の女子学生よりよく知っている者が多く、心臓疾患、こう頭癌、ぜん息、胃かいよう、皮膚の老化等で有意差がみられた。

表5. 喫煙関連疾患等についての知識

(回答率：%)

項 目	大学生 (150人)	医療短大生 (199人)	女子短大生 (199人)	4年制大生 (200人)	合 計 (549人)
心 臓 疾 患	72.0%	59.8%	54.0% ***		57.7%
肺 癌	96.7	97.0	98.5		98.2
こ う 頭 癌	92.0	82.4	83.0 *		85.2
ぜ ん 息	98.0	93.0	91.0 *		93.6
気 管 支 炎	87.3	87.9	87.0		87.4
胃 癌	54.7	57.8	46.5		52.8
胃 か い よ う	53.3	49.7	35.0 ***		45.4
胎児への影響	100.0	100.0	100.0		100.0
血 管 疾 患	88.7	82.9	83.5		84.5
運 動 能 力	88.0	88.9	93.0		90.2
皮 膚 の 老 化	80.0	59.8	66.0 ***		67.6

* P<0.05 *** P<0.005

未成年者の喫煙は禁じられているが、未成年者の喫煙は悪いと思う者43.0%、どちらかというと思う者27.7%であり、残り約30%の者は悪いとはいえない・個人の自由であると喫煙を肯定的であった(図1)。未成年者の喫煙が禁じられている理由として(2項目複数回答)、表6に示すように“一般に健康によくないから”“発育途上に有害だから”を約90%の者があげ

表6. 未成年者の喫煙が禁じられている理由

(複数回答)

理 由	回答者(549人)	回答数	(回答率)
法律で禁じられているから		45人	(8.2%)
非行につながるから		25	(4.6)
一般に健康によくないから		488	(88.9)
発育途上に有害だから		487	(88.7)
人に迷惑だから		43	(7.8)
将来禁煙しにくくなるから		10	(1.8)

ており、“非行につながるから”“法律で禁じられているから”をあげた者は約8%であった。しかし、若い時からの喫煙は“将来やめにくくなるから”と答えた者は約2%で非常に少なかった。

成人の喫煙に対しては、男子の喫煙は悪い・どちらかというと思うと否定的な態度の者と、悪い

渡辺：女子学生の喫煙に対する態度とその保健意識

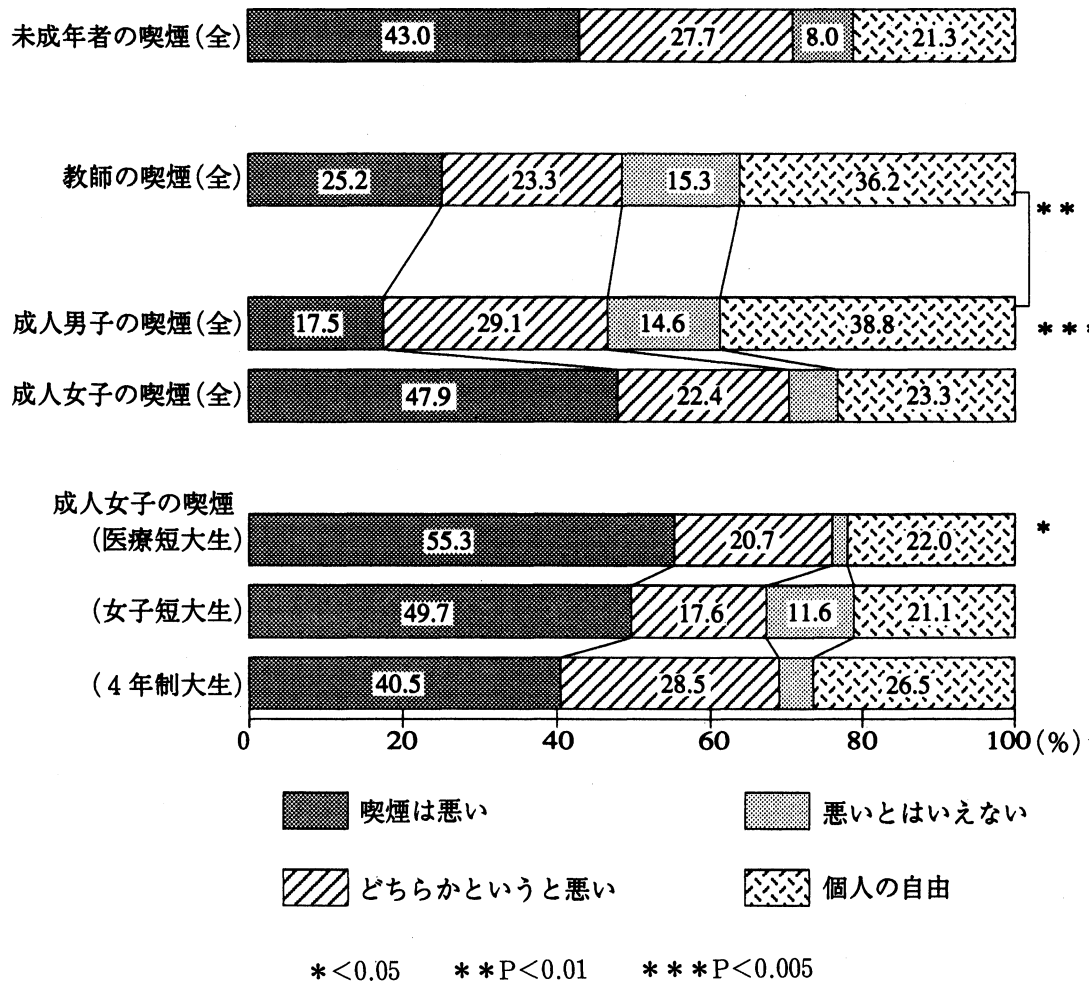


図1. 喫煙に対する態度

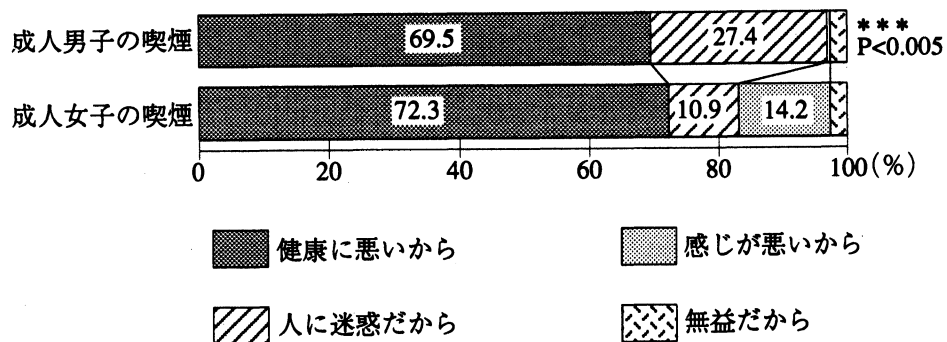


図2. 成人の喫煙が悪いと思う理由

とはいえない・個人の自由と肯定的態度の者が約50%ずつであったが、女子の喫煙は約70%の者が否定的であった(図1)。成人の喫煙の悪い理由は、喫煙に否定的態度を示した者の約70%が男女

とも“健康に悪いから”と答えているが、次に男子の喫煙では“人に迷惑だから (27.4%)”に対し、女子の喫煙では“感じが悪いから (14.2%)”について“人に迷惑だから (10.9%)”となっている (図2)。

未成年者を指導する小中高校の教師の喫煙行為に否定的態度の者は約50%であった (図1)。

未成年者の喫煙、成人男子の喫煙、教師の喫煙に対する態度は、大学や学年、喫煙経験の有無による違いは認められなかったが、成人女子の喫煙に対して医療短大女子学生は他の2つの大学的女子学生より否定的態度の者が多かった。

多くの人の集まる場所で、特に病院診療所等医療施設や長距離列車等公共輸送機関での喫煙に対しては、医療施設では全面禁煙にすべきと思う者は全体の16.9%、列車の全車両を禁煙にすべきと思う者35.3%と少なく、さらに1年生より2年生に少なかった (表7)。2年生は1年生より喫煙経験者が多いが、喫煙経験の有無による違いは認められなかった。

表7. 医療施設や長距離列車での喫煙について

対 象		1年生(259名)	2年生(290名)	合 計(549名)
医 療 施 設 で の 喫 煙	全面的に禁止すべき	117人(45.2%)	77人(26.6%) ***	194人(35.3%)
	指定場所に限る	142 (54.8)	213 (73.4)	355 (64.7)
	制限する必要はない	0 (0.0)	0 (0.0)	0 (0.0)
公 共 輸 送 機 関 での 喫 煙	全車両禁煙車に	56人(21.6%)	37人(12.7%) *	93人(16.9%)
	半分程度禁煙車に	174 (67.2)	220 (75.9)	394 (71.8)
	一輛程度禁煙車に	29 (11.2)	33 (11.4)	62 (11.3)

* P<0.05 *** P<0.005

3. 今後の喫煙について

今回調査の女子学生全体の95%が今後喫煙しないと答えている。しかし喫煙経験のない者のうち約2%が、喫煙経験のある者では約25%の者が、今後の喫煙について、わからないあるいは喫煙したいと思っている (表8)。

表8. 今後の喫煙について

喫煙の経験	経 験 あ り (79人)	経 験 な し (470人)	合 計 (549人)
今後について			
喫煙したい(する)	3人(3.8%)	2人(0.4%) ***	5人(0.9%)
わからない	17 (21.5)	5 (1.1)	22 (4.0)
喫煙しない	59 (74.7)	463 (98.5)	522 (95.1)

*** P<0.005

VI. 考 察

女性の喫煙は本人の健康ばかりでなく、胎児や乳幼児の健全な発育に悪影響を与え^{4) 5)}、また母親の喫煙は青少年の喫煙に特に大きな影響を与える^{7)~10)}。しかし最近男性の喫煙率は減少の傾向を示しているが、女性の喫煙率は減少していない。

女子学生の喫煙に関して、地方都市女子短大生の喫煙経験率は約30~40%^{11) 12)}、25.2%¹³⁾、4年制女子大生で、14.3%¹⁴⁾、6.6%¹⁵⁾、共学4年制女子学生で9.1%¹⁴⁾、全国6ヶ所の看護系専門学校生で、24%¹⁶⁾等の報告があり、さらにこれらの喫煙率も約6~11%と地域や大学の種類によって異なる。また学年が進むにつれて喫煙率、喫煙経験率とも増加している^{11) 14)}。

今回の医療短大、女子短大、4年制大学（共学）の1・2年生女子学生の喫煙の状況は、喫煙習慣のある者は7名（喫煙率1.3%）であり、これらを含め喫煙経験のある者は14.4%で、喫煙率、喫煙経験率とも比較的低いといえる。喫煙習慣のある者は女子短大生のみであったが、喫煙経験率でみると、大学による違いは認められなかった。しかし1年生より2年生の喫煙経験率は高く、好奇心から、お酒を飲む時や食事のあとに喫煙する者が多いので、学年が進むとコンパ等の喫煙しやすい機会が増加し、喫煙を経験する者も増加すると思われる。喫煙を経験する機会が増えると、喫煙習慣者となる可能性もあり、また女性の喫煙をタブー視して来た社会風潮により今回の喫煙経験者のなかにもっと多くの喫煙習慣者がいることも考えられる。

喫煙の健康への有害性はほとんどの者が認めていた。受動喫煙の有害性も約90%の者が一応認めているものの、喫煙経験の有無により有害性の程度に差がみられ、喫煙経験者は受動喫煙をそれほど有害と思っておらず、また受動喫煙を迷惑に思う程度も小さい。

喫煙との関連疾患として肺癌、ぜん息、気管支炎等呼吸器系疾患はよく知られていた。また胎児への悪影響もすべての者が知っていた。しかし胃癌、胃かいよう、心臓疾患等の関連^{17)~21)}はあまり知られていなかった。

喫煙・受動喫煙の健康への有害性はほとんどの者が認めているが、未成年者の喫煙に対し、喫煙は悪い・どちらかというと悪いと否定的態度の者は約70%にすぎず、成人の喫煙についても女性の喫煙に否定的態度の者は約70%であったが、男性の喫煙に否定的態度の者は約47%であり、大きな違いがみられた。また未成年者の喫煙防止教育をすべき小中高校の教師の喫煙に対しても、男性教師をイメージしたのか否定的態度の者は48.5%で半数を超えなかった。未成年者が喫煙を禁じられている理由、成人の喫煙がよくない理由も、大部分の者が健康への有害性をあげている。しかし女性の喫煙の場合には、女性の喫煙は感じがよくないことを理由にあげた者も約14%いた。教師の喫煙は児童生徒への受動喫煙の影響も心配されるが、職員室等を禁煙にしたり喫煙を規制することは未だ難しいのが現状のようである²²⁾。また、長距離列車の一般車両は禁煙車両に比べ列車内空気が汚染されやすいが²³⁾、これらの全車両禁煙や、病人の集まる医療施設の全面禁煙に賛成の者は比

較的少なかった。

このようにしてみると、喫煙や受動喫煙の健康への影響について、未だ十分理解されているとはいえない。今後喫煙するかもしれない・したいと思う者が、喫煙経験のない者では約2%、喫煙経験のある者では約25%おり、喫煙の魅力の大きさがうかがえる。

V. 結 び

鹿児島市の女子学生（医療短大，女子短大，共学4年制大の1年生2年生）の喫煙の状況や喫煙についての意識や態度等に関するアンケート調査を行ない，次のような結果を得た。

- 1) 喫煙を経験した者は14.4%（喫煙経験率）で，このうち喫煙習慣を持つ者は女子短大生のみ7名（喫煙率1.3%）であった。喫煙経験率の大学による違いはみられなかったが，1年生より2年生の喫煙経験率が高く，また飲酒の機会に喫煙する者が多い。女子学生の喫煙と家族の喫煙の状況の関連は今回の調査では認められなかった。
- 2) 喫煙・受動喫煙の健康への有害性はほとんどの者が認めていた。しかし，未成年者や成人女子の喫煙については，悪い・どちらかという悪いと否定的態度の者が約70%であったが，成人男子や小中高校の教師の喫煙については否定的態度の者は約半数近くで，喫煙は悪いとはいえない・個人の自由であると肯定的態度の者が約半数おり，男性の喫煙には寛大であることがうかがえる。また喫煙の悪い理由として，大部分の者が健康への有害性をあげていたが，成人女子の喫煙については，喫煙は感じが悪いからよくないと思っている者も多かった。
- 3) 喫煙と関連のある健康障害として肺癌，ぜん息，気管支炎等呼吸器系疾患や，喫煙の胎児への悪影響についてはよく知られていた。しかし，胃かいよう，胃癌，心臓疾患等と喫煙の関連についてはあまり知られていなかった。
- 4) 医療施設や長距離列車等の全面禁煙に賛成の者は比較的少なかった。

終りに，調査に御協力いただきました女子学生の皆さん及び当時鹿児島大学教育学部学生の平野ちづ嬢に感謝致します。

なお，本報の要旨は，日本体育学会第40回大会（1989年10月，横浜）において発表した。

文 献

- 1) 厚生統計協会：国民衛生の動向—1991年版—，P97
- 2) 平山 雄：直接喫煙タバコ病と間接喫煙タバコ病，診断と治療，69(6)，881—908，1981.
- 3) 富永祐民：喫煙と健康障害，公衆衛生，50(4)，224—229，1986.
- 4) 並木正義，平山雄：喫煙の医学，P183，講談社（東京），1984.
- 5) 前田信雄：酒の害たばこの害，P157，日本書籍（東京），1979.

渡辺：女子学生の喫煙に対する態度とその保健意識

- 6) 小川 浩：喫煙の心理，公衆衛生，50(4)，236-244，1986.
- 7) 伊藤 章：喫煙予防と学校保健，学校保健研究，24(12)，558-561，1982.
- 8) 小川 浩，富永祐民：中学生の喫煙—喫煙状況と関連要因—，日本公衛誌，32(6)，305-314，1985.
- 9) 白水美智子，柴田彰：中学生の喫煙と諸因子との関連，第二報，喫煙行動と喫煙による健康障害に関する知識並びに生活環境との関連，日衛誌，40(3)，651-658，1985.
- 10) 野津有司：青少年の喫煙に関する調査研究第2報—高校生の喫煙行動に関する諸要因の検討—，学校保健研究，27(4)，190-200，1985.
- 11) 田中純子，杉本文子，他：女子短期大学生における喫煙習慣の形成要因に関する研究，学校保健研究，30(4)，196-204，1988.
- 12) 園山一俊，西ゆか，他：短大生の喫煙と性行動，日本公衛誌，33(11)，695-699，1986.
- 13) 竹田由美子：女子短大生の喫煙に関する知識と態度，第37回日本学校保健学会講演習，P280，1990.
- 14) 村松園江：女子学生の喫煙行動と生活習慣の係わりに関する研究（第1報）生活習慣および喫煙に対する意識について，日本公衛誌，32(11)，675-686，1985.
- 15) 木根渕英雄，柳修平：地方都市女子大生の喫煙に対する態度，学校保健研究，31(2)，96-100，1989.
- 16) 古田真司，西村知子，他：未成年女子の飲酒と喫煙行動に与える要因の検討—飲酒及び喫煙行動とその意識の相違について—，学校保健研究，31(5)，235-243，1989.
- 17) 平山雄：タバコ病の疫学，診断と治療，59(6)，951-969，1971.
- 18) 浅野牧茂：喫煙と微細循環，診断と治療，59(6)，984-990，1971.
- 19) 青木伸雄，堀部博，他：喫煙と循環器病，公衆衛生，50(4)，230-235，1986.
- 20) 生方享司，仲尾美穂，他：胃癌と飲酒，喫煙の関連，日本公衛誌，35(6)，286-292，1988.
- 21) 福場良之，川西昌弘，他：消化性潰瘍の発症に及ぼす喫煙・飲酒習慣の影響について，日本公衛誌，34(6)，271-277，1987.
- 22) 川上幸三：教員の校内喫煙の現状と問題点—北海道の小学校・中学校・高等学校の場合—，学校保健研究，33(4)，177-185，1991.
- 23) 川畑徹朗，西岡伸紀，他：特急列車内における喫煙の空気汚染，日本公衛誌，33(9)，559-567，1986.